

<会員の広場>

第 2 回 UEJ 「大学開放研究会」 報告

大阪教育大学准教授 出相 泰裕

第 2 回 UEJ 「大学開放研究会」は 2015 年 10 月 3 日 (土) に京都にある龍谷大学深草キャンパスにおいて行われた。第 1 回では、第 1 部として、上杉京都大学名誉教授の講演と質疑応答、第 2 部として、参加者が前もって討議事項を提案し、参加者がそれらの議題について討議する共同討議が行われたが、第 1 回とは思えないほど、活発な討議が行われた。

第 2 回も終了時間をオーバーするほど活発な討議が行われることとなった。

第 2 回の参加者数は主催者側を含め、14 名で、大学教員、大学職員、大学院生及び大学開放に関わる民間教育事業者から構成され、参加者は第 1 回に続いて多種多様となった。また今回も東京からの複数の参加者があった。

第 2 回の研究会も 2 部構成で、第 1 部は『アメリカの大学開放－ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開－』の著者である南山大学短期大学部の五島敦子教授による講演「知識基盤社会に対応した大学開放」と質疑応答、第 2 部は共同討議であった。

1. 五島氏講演

五島氏は大学と地域の関係は、大学の恩恵を受けられない人々に大学に集積された知を届ける「アウトリーチ」から、大学と社会の相互関係性の深まりが地域社会の問題に対してよりよい解決を生み、同時に大学の教育と研究の質を高める「エンゲージメント」へと変化を遂げてきており、両者の関係は一方通行ではなく、双方向的・互恵的なものとなっていくことが世界的に推奨されてきているとした。

そして、「互恵的に交流し、探求し、さらに、知識、専門知、資源、情報を応用することを通じて、外部の支持者やコミュニティとの直接的な相互作用に貢献する」大学、あるいは「理論の探求に軸足を置きつつ、複数のディシプリンを融合させイノベーションを生み出すことで社会のニーズに結びつける」(パスツール型の) 大学である「engaged university」の概念について説明し、現代のような、知識基盤化が進行する社会において

は、地域の問題解決には大学で生み出された専門知と社会での実践から生まれる経験知の相互作用が必要となっているなど、アメリカを中心に、その背景について話を進めた。そして、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校など、エンゲージメントの事例の紹介を行った。

確かに、「コミュニティ・サービス」から「コミュニティ・エンゲージメント」へということも言われており、大学が大学開放を推進していくうえで、大学が社会・地域に貢献するのではなく、両者がwin-winの関係になることが重要とされている、その背景を理解する上でも、この講演は興味深いものであった。

2. 共同討議

第 2 回では以下の 3 つの問題提起が寄せられた。

問題提起 1 天理大学 佐々木保孝会員

「大学と地域のエンゲージメントの関係の中で生まれる新しい知の評価について」

問題提起 2 佛教大学 石川智規

「大学と地域の関係性の構築（近隣住民との関わりを踏まえて）」

問題提起 3 創価大学大学院 金明姫

「大学開放によって、非伝統的学習者が大学で学ぶことで大学の知の環境がどのように変わっていくのか」

問題 1 では、専門知は学術研究のコミュニティの中での認証を経て初めて「知」となる面があるが、大学開放の文脈で生まれる知においては、知が「知」として社会的に認証され、流通していくためにどういった仕掛けがあり得るのかという問題意識から提起されたが、議論は第 1 回の問題提起「大学開放の養成する人材を活かす場を大学側がつくっているだろうか」と重なる話ともなった。履修証明制度はできたが、学びとその成果の活用の循環をどう作っていくのかは大学開放発展に向けて、引き続き課題となっている。

問題 2 は、大学の地域開放を考えた場合、大学が立地する近隣住民の参画が必要だと考えられるが、佛教大学の場合、近隣住民に十分なアプローチができているとは言いがたく、大学と地域との関係性の構築について、近隣住民との関わりやつながり方、またその方策についてアドバイスをもらいたいというものであった。京都の場合、市内に大学数が多く、

既にいろいろな大学が地域と関係を持っている。そういった中、無理に近隣地域と関係を持つよりも、世の中には様々なコミュニティがあるわけであるから、佛教大学の個性を活かして、浄土宗関係者に対して生涯にわたる学びの場を提供していくというのも 1 つの手ではないか、あるいは佛教大学は既に京都四条で大規模にエクステンション活動を行っているわけであるから、それを充実し、個性化していくというのはどうかといった意見が出された。

問題 3 は、韓国においては、高齢者のための教育、学習に関しても、大学の役割がますます重要とされてきているが、非伝統的学習者が大学で学ぶことで、大学のキャンパスはどのように変わっていくか、またどのように変わるべきかについて意見を聞きたいというものであった。確かに、学習動機の強い成人学生が混ざること、伝統的な若年学生が好影響を受けるのではということがしばしば言われるが、それに関する実証的な研究の蓄積は薄く、実際にどういった影響が起きているのか、あるいはどう影響を起こしていくかといったおもしろい研究課題になるのではないかと、また成人学生は若年学生よりも多くの経験を持っているので、教育そのものもその経験を資源として活用すべきものとなっていく、グループワークの活用など、教育上の変化も起こりうるといった発言があった。

出相 泰裕 (であい・やすひろ)

山口県生まれ。大阪教育大学教職教育研究センター准教授、放送大学大学院客員准教授。専門分野：社会人学生論、大学開放論、リカレント教育論。著書：編著『大学開放論—センター・オブ・コミュニティ(COC)としての大学—』大学教育出版、2014 年。共訳、OECD 編『地域社会に貢献する大学』玉川大学出版部、2005 年などがある。所属学会：日本社会教育学会、日本生涯教育学会、日本学習社会学会、日本高等教育学会、日本比較教育学会、日本教育社会学会、NPO 法人全日本大学開放推進機構。